

著
色
江
西
暎
三
編

^ 13
2929
3



門 へ 13
號 2929
卷 3

淀の曙 二編 叙

本人 某 余が著述の傍に在りて評しんばこれ

はさうやあ行いませ中々にいふ或る事人情

本と聞くと其嘆何人の事と申す中々に大と小

の字にあらうと申す人けもどきと稱する人情

と云ふは何の行増ぢやん和漢古今の事其務登

経實傳の事と申すもみよる人人情小基けり人

昭和九年
七月六日
晴末

情を憂へ何れの人今賦す不總名をよむ世
双紙をよまば可あらん余欣悲とて浮き
編むを以て浮世双紙のたまはるるに
せも教を馬鹿先希がよも世間を浮き
て身と身ふらむ人の心長念任生儀の等
可し人の毎貴人の務ありて教美の家
人を持たむは其の苦心を教子ども身持人

安んずる人も活命は為小身は被り行
時を沖動する所を電の煙に後ぬ今爰と
以て二六時中や事業を忘何あわづま
人同し其に限ふあはるるも禽獸魚虫
我々の所被るる毛鱗甲を天地間
を授けて衣を衣を衣をのり食物を
けは身報に疾く新出く道と家先

くさあひしむむ務とすれど終ひまひぬらへ飽あ
くさあひしむむあひまひ加あひまひく大小相犯あひまひしあひまひさるふ公あひまひの休あひまひむ
心何あし周あひまひてさの母あひまひよけを清あひまひくさあひまひの苦あひまひの
身あひまひまじむるをひて為あひまひ世あひまひふいひきりあひまひ勞あひまひく
深あひまひくは母あひまひよけを清あひまひくさあひまひの苦あひまひの
感あひまひ通あひまひくもああひまひんく教あひまひ校あひまひ子あひまひ始あひまひんくあひまひは
覺あひまひりあひまひ離あひまひ公あひまひ飛あひまひ教あひまひまの浮あひまひ沈あひまひまをあひまひひあひまひられ

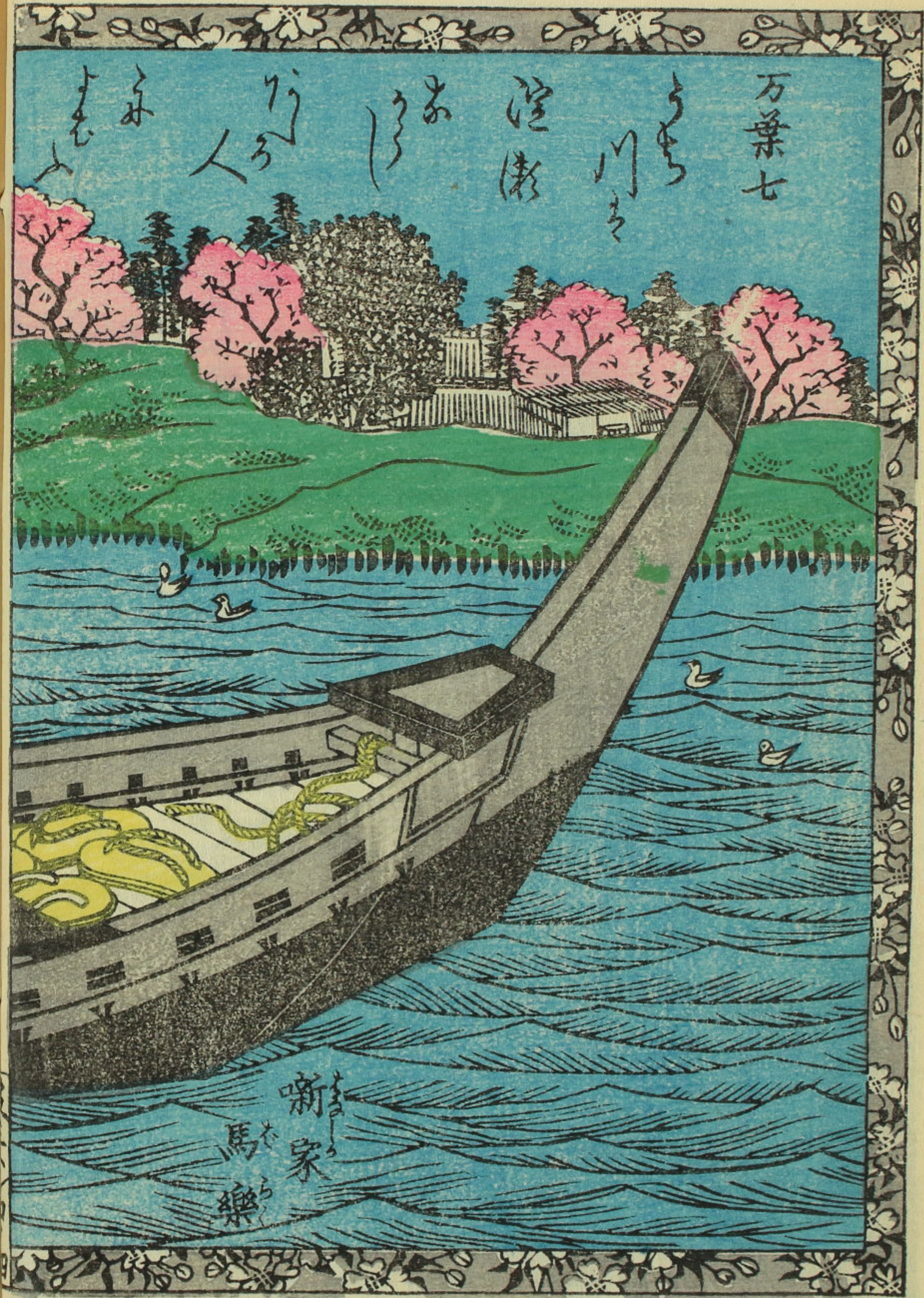
にをくく結あひまひく做あひまひして長あひまひき夜あひまひの依あひまひと
きく今あひまひより總あひまひ名あひまひをくまあひまひ世あひまひまじむあひまひしあひまひく呼あひまひ
張あひまひくはらんしあひまひも相あひまひ持あひまひ家あひまひに
夏あひまひ雲あひまひをあひまひす峰あひまひ掛あひまひ障あひまひ水あひまひ聲あひまひ夕あひまひ
拙あひまひ者あひまひ半あひまひふ欠あひまひ次あひまひして終あひまひ



一光之舟
舟中



柳の川岸の歌妓
於花
柳の川岸の歌妓
於先



春色波迺曙第三編卷之上

東都 松亭金水編次

第一回

古人の陰徳の耳の中の鳴きごと。我のそ是を感ず
 とやんを人の為小若とす。そ是を死人不風徳してその
 若と衝つてとらるる若ありての若ありてと。妻下初より
 妻女のさな。つとく不便おひけはるる樂とて其を
 伴ふ。その金とあせせけらむ。妻女も今人解しひて。その



如云

おとひま

けし

水差の

あや

ちと

しと

とら

六帖 海人

けいしきまわらう。豫小をいの毒をなげはんしん子 十三世の也
 りごうトのひり安女と促して歩むるもさく社を死危境
 所小未にけきぶあひの後をあらうて徳を屈め一礼は
 一休よりさうしんじきまい。毛いきつて世波知らば女の
 實へんじきまわらう。波のあつたぐりてこや 一しんじき
 まらう。入若くはさうらぐんなく。障の光中病人が外つて居る
 一様さうくそが糖系もわらうともまふまふと積あふは積
 げんうトのひり彼方の社人とまをを 五病人があらうまをを

ともちりあちの口良人さんう 女 一初 一初小を初とあらう
 まらう。世とじきいまをさうらう。種く昔方とらうしん
 まらう。まらう。一のモウ。彼是二月修り。枕とあげらるもあらう
 心休小治方とらう。まらう。まらう。一初 一初 一初 一初
 一をいへトのひり子と跋鼻。波の口張るその体小初とあ
 いあつたも。初息しんと身を抱き。初 一初とあつた三圍とらう子
 代小初も居あつた。女 一初 一初とあつた。初とあつた。初とあつた
 一初とあつた。初とあつた。初とあつた。初とあつた。初とあつた。初とあつた。

まこと長給もさる事と云ふて。ふつくと。着るてわもぬもわつま
まを花菜とて受が覚て。如版の代りふもる。後せ入ある世
の中も花菜も意とまよとまよもよまよもよまよもよまよもよ
まをん。後めあがら不候とて。おしあもつし。時何れも上
付かぬア。あませうらう。ア。ア。一歩。二歩。おきふせよ。その時
在が。毛の容る。慶る。まよ。一。眼で。ん。究めませう。
影のふと。お角の口に。心を推く。やうごま。左様であつて
世のの意とまよ。影。て。受て。逃。投。け。やうと。言。え。

お座を聞い。て。方。る。あ。推。ぎ。出。て。も。ま。や。ア。ま。ま。せん。お。き
弟ハお坊さんで。初。一。あ。も。ど。自。己。い。左。様。濁。の。り。ま
おやア。さ。る。給。へ。が。影。象。ご。け。其。エ。り。ん。ご。お。ち。あ。や。ア。あ。る。あ。へ。
は。父。の。意。を。承。て。如。版。の。代。り。ふ。も。る。奴。が。あ。る。り。ん。ご。左。様。お
若。し。ご。と。て。ご。百。や。一。条。の。合。ふ。困。る。奴。ハ。お。り。や。ア。い。め。一。
ま。ま。ご。う。う。お。坊。さん。ご。と。ま。ま。ま。ま。の。サ。お。い。ま。ま。と。海。判。の
う。ち。モ。お。覚。へ。事。り。ま。ま。ご。と。お。ん。せ。う。う。ち。あ。や。ア。極。う。が。教。い。事。ら。う
と。ま。ま。ま。ま。ご。う。ま。初。一。左。様。例。の。所。が。下。裏。入。ま。ら。う。て。後。手。は



同きまゝ二人に送る。爰ふかり門づきの娘とふいお花あて
舟のお懸づ長船らひ指りおし舟へ入る。一ツ言の舟のまゝり
常らふ産らう法らして。独とふある茶由飲せ日毎魚を煮
深りの舟年早く快をさふ。彼よ此よと宿へて。母
小進のや公と福せと務もたぐ。一月二月送るわらふ福ハ稍
小ままりあき。元来初まて。般世常年ゆるぬ方ハあ後のと
も構へる多くの入目を右たて。終あふやぶふ今ハ舟の小
番ハおも困るをうり小なりゆけど。何処心傳へるをたぐ

然とて痛ふ外さる由小お後あきだ苦勞ありて。陸とも
たうあんとあふいより入用中周らぬ体ふんせとけても
お窓ハ痛まらう狗羊利ニツタの衣敷さるお妙ふしん
仕立と指す大とモウ小まひも。あつまのといふ人ども。右ふ
いふのも氣流涙面傷さふし。いふも。おたのむら
然とす。いふいせん。福舎ふ考へても思案つらむ。お花
しんかお初と信切の年。隙の元。お花とらふハ匹偶もたぐ
子さへあつる。お花とらふ。その年ハみ十近く。若よりいふ

貸して。多利と借りまじり。今日の役す。と存す。す。の
及び。さるる。夜。不。或。夜。不。傳。く。ぬ。き。此。以。毎。の。長。故。ら。ひ。自
の。入。目。も。さ。け。ま。ば。何。様。う。ま。面。は。程。も。う。店。人。ふ。り。め。く
若。苦。當。あ。り。て。海。の。隣。り。内。に。何。で。程。む。と。の。ひ。け。れ。お
舞。い。散。ら。せ。て。先。示。一。可。ま。あ。る。と。左。様。ご。ら。う。ヨ。然。し。お
お。の。感。ぬ。き。思。ひ。と。く。世。様。を。し。て。あ。げ。ま。さ。る。何。様。と。く。今
時。の。十。八。や。ま。の。妻。女。さ。ん。を。六。冬。の。前。尻。を。振。り。て。さ。ら。う
考。へ。親。の。さ。る。ん。ご。不。構。や。う。後。人。さ。う。し。も。お。花。さ。ん。を

一。ま。せ。ん。け。さ。ど。毎。晚。ま。刺。ま。せ。い。お。日。不。や。ア。後。母。も。ま
と。を。明。し。て。せ。さ。ア。さ。り。ま。ん。ま。へ。う。今。を。秘。せ。か。ま。は。は。ど
後。母。に。物。堅。く。ぞ。大。さ。の。事。知。ま。ら。ま。い。へ。右。様。さ。それ。に
何。も。も。さ。後。人。然。し。お。花。さ。ん。も。あ。る。後。母。が。夜。九。の
飲。け。し。お。初。む。き。と。又。日。を。さ。さ。ら。う。何。と。う。と。う。て。お。さ。せ。ん。す
後。母。の。さ。る。ハ。骨。材。が。化。て。某。の。世。様。で。り。て。あ。け。や。う。さ。ら
背。の。う。さ。期。ま。ま。ぞ。ぞ。せ。骨。材。ハ。骨。の。ね。入。替。お。か。を。あ
一。お。さ。ん。お。夜。ま。が。や。ア。も。振。り。て。ん。ま。せ。う。の。世。様。も。後。母。で。も

此う。お乳方を長う人いありませう。一七のやアおあな
くサ。新内免どの客を元あ丸で受うと移人奴が千方で
もい方でも呼引つて後を長うぢやアねんおあを免言
大極上さ。一押が後いやうとけとどはかどやアおあ茶
もあま休せうと息あけう。まあうた振一せう。札とて
おあさん。一承忍ご遠他も移下すあ。うと息あまの
あううとたさ。一承毎あてその見くを送りけり

第二回

いあアおあいの朝しりの夜が吾儕も長張後金あア不
断不自然さで居るう。オインとらの福ふゆつと。とあを利
心も傷やア些い出来もせうか。彼知の授授えんの金を
さう一友傷ても。カア月小二条う十夜あうとら。そん
金を信て見家利息ふをり連修とまで。ゆ人もあ人も
あう。わいまたううあ家の變で。いけいゆもあてえんあせえ
刻まで歩ゆては百や五百の。提後を每晚とら。連を返
さ世後かな。息が一たん息あま。合株のれ月小二百で信

て之を撰ひの後に此の書齋が借てあげやう花ややくお金
を借る由りなま移小利は三ツおまらうねえん「三ツ」
そまらう言ひのハ二朱借て毎日八文の金で廿二日の目
うらやと出たやう小借人があるものゝうらやとまを二朱借をえ
あまの月ハ二冊といふ利息ヨ。まをまらうい「三ツ」
門づけふ些老をえませううま借へ何うか借が「三ツ」
夜のうらやと手紙でもお金の居りやア。面ハ人ハ見えんまやうね
何れもまが一のまを「三ツ」まで孔万のうらやとまやう。些も撰ひの

四百は此の麻より多不どお襟りのあつ。何れ
ては流小池よりうらやと口癖ある。お金と處ひとまを
てハいふ若きまのあま「三ツ」お花書何れも「三ツ」
麻とまらうと「三ツ」今お花や快うて先刻うらやと「三ツ」
麻とサアお茶の由る「三ツ」そまらう只一本でもお花やう
まらうまらう「三ツ」お花やう。勿仲あがこのお茶ハ昔やで
甘いやで「三ツ」実小欣持へうらやと然とて跡で約小流て
元くとし「三ツ」「三ツ」そまらうやアまが止まらう。何れも「三ツ」

んべりり。よろよん 久。どう ぐらん
んく出をけて美刺時が小急いで喰らね由合点がり
あけほど方一々若一まふ。まねまの柔務あんぞで教ん
て人の氣遣ふでもちるのぢやあいら。此夜に例より早く子刻
小舟の周をまて喰り喰らうまふおのまご言ふ。何れも存
い業ふらう。おあへ船の爲ごこつて左様とて長久城の
やうぞ。存舟が方小急いでんま合点ふはうり控切あいら
ま程おこあふ。ま井つり止てまご彼母とやぐむ茶え
ふまお目ふがいつ時何とま旅の仕やうかあいら。まで終る

とが出ますあいら。まは船がて性来の人子機つて粒乞
ても舟と漂白小急のま巨珠子おあいら。今とておま先は船
しつかり。ままお由とつらまうまのあやうまの女のたを
守る目や減ては舟と様さまの。お舟が七返りとも花
庭がつてもせして居らう。長夜を欠て、仕所へ行くま由
るらるのト派あいらのあごま茶を夜に始終憶きて。ま
まのま茶を果て教とあけ。一やうわと左様お思ひのま
もまおあいらませんか。ま程あいらませんません。今体ハ

下 抱あつら。お熱とると長けきと大とせとあひしらう。森
こえると文の林由紫系だ。冷方があきくまの隣の妹を
ふれんで初くうしきす下受てか態ハ枕を捲げ。身先伸
てお熱が終て捲るがう。まや古板。まよりい。ま程くま
を長くえ熱入と。氣に満つらう。捲るや。ま今のよるう。神
も由時世あふとあふもどまよりう。世ハ候。世をいの
人の門さを辨であらうのふ。ままをゆてき。知そての竟
と抱えぬ。何れ何れと因果やう。一人に世ふ由短うい命。一人ハ

あつて居るがう。まのあつた長燃らひ。奉もけあの娘の
思ふ。こまねとまよも苦勞させせる。何の業も下いひさして返
潮我俯。お花ハおの背と捲さす。まモウくま程お熱
いり。い。まあのて下さす。モウ。ちもか。あ。証。と。う。く。世。夜。の
まよひひまをう。始る。初く。い。み。は。で。木。三。ち。程。せ。う。う。と。あ。ひ
ますと。通う。が。う。の。か。人。を。け。き。と。ま。を。う。ん。ひ。く。程。と。み。か。と
ついで下す。その人ふさを圍まごらうと。か。令。を。白。ん。で。長
ま。い。ら。う。何。れ。も。て。道。を。渡。ら。う。と。返。し。て。け。き。と。可。い。は。ら

何れも是れと人の信切實にけ方も困る。左様あり
どまじり解ひとの通るまで送付て其廿宅へ向ひて
開て入る。こ四境もまゝの類が二ツ。何方のお方う知
まひけきど。人おの鬼もあらとりよのハ。是といふのそま
下井うト帯の回を捲きつて。母のお徳小令と見え
位もまゝ又日や六日半もあつても困らまゝ。まゝの義母え
何れも由後といふと。右よりのと。左様をまゝの義母え
悦びまゝ。野守をまか。徳ハお徳の若しとを。恐びて

荒示うちりひ。一そまのハ。三過の功名。こまうのいめど
そのお方の信切。勿体。まゝの。あつて。夫ハお徳が孝
行を。自ら。まゝの。四境。まゝの。投けて。下まの。この。心も
あらう。左様。で。かく。て。通り。の人。が。殊。ふ。まゝの。一。果。う
二。米。い。まゝの。まゝの。の。ぞ。も。まゝの。が。類。二。ハ。膳。まゝの。大。迷
ア。ま。う。そ。ま。が。あ。ま。が。お。あ。も。些。ハ。樂。が。あ。ま。が。ま。ま。が。殊。ふ
怖。い。ま。う。ウ。こ。法。を。敷。し。と。位。ハ。疎。で。何。様。で。由。な。る。は。れ。ど
万。一。怖。あ。心。も。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。一。生。の。所。端。ふ。た。る。何。年。と



一色りの藤花がやままろくさあのみあやア付り正然
 この糸を断しき。厚紙を斤ぐやうふ。些づいゝ気も直
 らう。さうも氣打うう。せと痛ひハ外那をどのやうあやア
 性後へまご理立こえまひまをうとまあがまびとれしくとお花
 いさきの若葉後下張浪の方の扱きまじりては出せが画
 考の倭とし。心を及りつ帰るゆ

春色淀迺曙第三編卷之上終

春色淀迺曙第三編卷之中

東都

松亭金水編次

第三回

干花の戸屋の初め舞い。その性體も思あふ。まご年性
 花ど雲あの上に行りさうさう。慈悲さへ伸く。まご弱冠ゆて
 ありける。あど小父務を志の中心小飲び。まご小籠て。目蓋
 小。さ。あ。の。こ。あ。ら。時。い。石。時。の。疾。ひ。由。出。せ。ん。と。葉
 あり心の泳く。馬。楽。あ。ど。小。肉。定。を。合。ま。せ。折。と。終。を

廊通の帯閑末社の傍俤と煩う小唄一五きど由初六希
いさよこ不由あねぬゆ法ての通いぞ。朝小唄小本あど出い
とをを親るを樂まこく。待を作てての獨吟下歌俳
清小由心を修てま処の舎との運坐と。史の障と費
まことあつ。え未豪家のとあね。誰う教まらざるりのあ
親く出入せんを心小をる老多けま。此透小名を
得る。素山堂作朝や。め京什逸外左月あど。させる
宗通あど。初朝帯閑相半ある。強人ども訪し

作朝
まき 一ヤ美且形時映の影あど。まよくあつまらら。巖
依あど。彼く。垂小泊らうと。と。と。処が。サテ。茅の屋
夫人が。田存の。あつ。大舞で。何お小。以。承。知。あ。い。う。方。あ
く。廊中のお供を。作。せ。付。く。と。て。イヤ。夜。の。曉。方。まで。お。守
あ。ア。困。り。ま。ら。今。漸。く。松。が。を。を。ま。ま。と。て。各。心。方。へ。教。れ。ら。い
中。の。あ。ま。ま。と。映。小。その。蒸。返。一。を。見。派。ま。ら。う。う。注。新。亭。へ。東。敷
山。の。西。七。つ。時。小。抄。へ。と。あ。る。と。左。折。継。け。ち。や。極。雅。潔。者。し
面。ら。う。い。ま。う。ま。ら。一。左。折。う。と。ら。あ。ア。大。強。ぎ。で。ナ。若。侍。小

あや。や。せ。め。い。り。り。
ゆ。き。の。屋。が。見。ぬ。そ。こ。と。こ。け。き。ど。何。指。由。彼。手。合。い。救。風。系
。と。こ。づ。く。と。強。く。と。る。存。び。方。が。可。笑。く。也。日。夜。の。大。さ。の。胎
。り。ど。未。敷。成。を。し。ら。ら。が。連。の。と。お。跡。こ。で。彩。一。お。で。由。ある。つ
。お。負。か。有。さ。ら。あ。り。ん。ど。と。ろ。ん。が。サ。テ。に。い。付。の。ね。り。の。さ。し
。い。ん。折。あ。く。ま。ら。入。来。ら。京。付。左。月。の。西。個。連。二。個。免。か
。こ。い。ト。下。雅。が。紫。肉。小。障。子。を。あ。け。て。を。奴。へ。誇。る。一。ヤ。ア
。くら。や。ア。お。拵。ひ。で。金。日。夜。の。お。漏。さ。し。一。々。お。あ。ら。る
。い。丈。人。と。初。お。功。つ。と。お。つ。が。ま。ら。る。と。別。れ。さ。ら。る。今。と。て。人

す。あ。さ。ん。ゆ。き。の。屋。が。見。ぬ。そ。こ。と。こ。け。き。ど。何。指。由。彼。手。合。い。救。風。系
推。来。し。て。日。夜。の。指。末。を。迎。下。言。と。と。居。る。奴。ど。マ。ア。く。此
方。へ。遠。入。ら。ッ。し。と。て。あ。ん。と。京。付。子。を。と。絆。の。頼。屋。を。小。結。が。あ
の。ろ。ろ。と。居。る。お。を。以。て。お。男。子。の。形。勢。ハ。い。と。い。と。刻。ま。ら。る。が。
ま。ら。ぬ。を。洗。へ。た。く。の。う。ら。ら。る。麻。布。を。洗。へ。た。く。と。い。は。れ。た。其
邊。の。新。湯。を。洗。活。い。と。い。は。れ。た。一。昔。併。し。お。は。れ。た。と。い。は。れ。た。
う。ら。ら。る。穿。鑿。さ。ら。と。ア。女。が。あ。く。は。を。考。へ。て。ち。ん。ぐ。と。血。を
吸。き。や。て。此。指。ふ。し。と。い。は。れ。た。此。指。の。威。力。あ。ら。う。と。し。た。結。度。未。来。不
ま。ら。ら。と。云。は。れ。た。一。併。と。う。其。正

嘲しつア。何ぞ結袂を世持来う。ハシ不履あまらるる是と邪
 志ざア。まご其の情合を世存秘へう。ごうも園子。実小自
 楽天が初小由人本石あまらるる。あつ傾城顔は
 のまふ。あまらるるふいと吟ど。六千古を費く。確云で此方
 ハ何処までも遠くはと。志河と胸小収めて居ても美人
 小深く心なちやア。乳まぎるりの骨てあ。サ。作朗。コレ。色加
 減小恍惚秘へう。ア。ア。ア。秘まを流さア。一。まぢやア。見
 うら系付ふにち。山と指南をうひて。見やうト。いふとき

秘して分付し。侍女二個で運ぶ物に吸りの猿小度蓋
 ハ。美舟判形の二ツの。一。定めて。食宿秘し。うらうと。湯豆
 膚を分付と。サア。冷秘へう。ちをかく。あまらる。然して。うらと
 逢泊を極めやア。心気が快ある。作原。イヤア。あまらやア。思。一。片
 とらやア。奇物と秘物と。常用小秘と。子。昔。左。月。子。何
 と何秘も。色ぢやア。秘へう。一。若。且。秘。の。如。在。あ。ま。ら。る。あ。や。ア。
 毎度。忠。肝。心。ぞ。ヨ。ま。ご。お。侍。女。の。氣。が。刺。て。ご。ら。お。秘。が
 上。秘。秘。ご。オ。ト。と。あ。ま。ら。る。く。作朗。トキニ秘。秘。秘。ご。の。秘。の



通う。子柳の岸とあつ屋町とを一筋のり。百人もあるませう。其を喰ひあひて。或ひは美女中の片を。あつ屋町の善女見まて水鏡の古枝風を。申小世古風どけきど痛し。丸髪小両天の簪片の沢とつ。山をを挿このゆらや何ぞ。まての役割を。あつ屋の愚伎がまませう。そとで何れも別荘を。ちとせま。秋葉の庭。客殿庫裏まで。切て。泉水の端。ちよと。阿屋を捕りて。今の

の巨女見。雨。茶を。大勢の女ども。小胡弓。笛。鼓。法。舟。下。上。河。岸。別。荘。を。採。入。て。業。終。へ。う。方。ま。う。四。角。荘。を。大。酒。懸。舞。と

位方の。何と安いぢやアとぞへませんう作「あるれどあの後白
 大形どけまて。金に存の外から移る。何あゝ美且那
 お儀、ません「左様サあらまア、まてつん度トひらお丁
 推が障子の外へをうつて「美且那さぬ馬樂さんか
 来りません」系注「眼のまゝ所へ移る。傍とらゝるゝ」
 「左様う盡小、まてとらん「いやくと強ゆく丁様頼り
 本をせん、莞尔とと笑ひあぐる障子を開け「今船
 廻る船は、金さぬお、おひやく中ひと。い美且那、お儀様とら

初るゝ。何と安いぢやアとぞへませんう作「あるれどあの後白
 「此るの用が、いう一向と見え限つて」左様サ肉と取筆の
 一条が、いひまて、大お口を、お流しうとせへまらん作「大遠
 生相うらむむ、お全盛といひ、お流しうとせへまらん作「大遠
 へ全盛を、いひまて、お流しうとせへまらん作「大遠
 居園おサ「うら左様も、いひまて、お流しうとせへまらん作「大遠
 今あつて、お流しうとせへまらん作「大遠
 へ、お流しうとせへまらん作「大遠
 結況バ「あるれど、お流しうとせへまらん作「大遠

さうし子。イヤこつどあアおまふ穢代ど一落外面白さうと
かぐんれ ぐんれんまうま
あア「使ふおお根今時いづまうくくと大違家金を考う人
ゆあつまうさうとが根奇藤で花中不晒為人いづま
せんを処で何解ふあせまう」左根サ准佐の出妻次才些ゆ
かやまう「左根サ准佐」として初ぐ妻女中や弟の正女
を考ゆるさうと左根サ准佐とて初ぐ妻女中や弟の正女
鬼の忌敷を形規あて初くと二述不出来ませうと粗多苦
を齋漬しあがる。あひく殺を考うつて日の暮るまで皆
あひく「あひく」
アあひくともこまへく降る

第四回

奥ふわのお麻が父ある。おんぐまに紙辨せて母のおあす掛
あのあまい。お麻をのて使アとあ。初か妻ゆまうと懐き
とくは考おとふんづけ。ゆふ書させあひけるが麻ゆまうと
よ世を考ると樹う考と根根同あ。西個が款き大うとま
ぬを考るとお悪びゆ店ゆまうとせ母子を考へ引るとて下
だま女のこく書ひあへ一件初五知が舟にさうとて、おあひ
あ祖母あるかあは叔母あう。今のこの家の子とあうて、何

不足なきものあり。兩個を腹小書させ。おく籠のこ
物細のあひまど。交ひ親へのを。心おぬ在。あは
う。まづ。き。佐。不。控。あ。く。あ。ぞ。揚。ち。の。の。不。使。さ。不。使。ら。そ
實。六。引。ら。う。く。さ。釣。く。月。日。を。終。る。あ。ぞ。小。お。夜。が。氣。性
お。押。不。似。て。いと。律。依。ある。初。不。也。何。時。う。揚。ち。の。不
思。う。と。て。今。う。大。う。人。も。知。る。表。を。さ。さ。て。の。妻。小。あ。う。ね。ど。
初。入。室。の。縁。も。あ。り。下。女。の。ど。く。い。扱。つ。ん。だ。れ。ど。か。り。も。備
ら。ん。ま。の。婢。女。と。共。と。小。雑。巾。が。け。ま。あ。お。け。り。一。日。初。入。室。の

一人の舎小在。銀箱の本。おど。備。け。て。居。る。処。へ。隣。り。と
あ。け。て。送。入。ら。る。夜。一。今。日。の。殊。小。あ。づ。ら。う。子。を。客。の。来。は
只。獨。り。遊。遊。左。様。と。お。在。あ。ら。さ。ざ。ど。淋。い。ら。う。ら。う。子
「ヲ。ヤ。快。さん。か。出。ま。さ。い。イ。エ。モ。ウ。と。ま。が。靜。で。道。口。存。の。さ。う
種。く。お。奴。が。毎。日。舞。と。お。ア。忍。と。ま。ま。ん。是。の。世。間。の。交。合
を。使。ま。せ。ん。け。ら。あ。ア。宣。け。ま。ど。不。圖。始。め。て。見。る。と。今。さ。う
小。エ。ウ。止。ま。い。ふ。小。お。ま。ら。う。ぞ。然。り。途。切。あ。げ。て。除。き。り。托
び。ん。の。未。終。へ。や。う。小。奴。さ。う。こ。の。心。ひ。ま。ん。一。ツ。ニ。お。お。の。史。由。宣

ハズ。全体をい人々来宜うて。老爺さんの方へ毎日每晚
ゆく人々入習う。まかりつ 来ることにサ初あのかい扱ふく。傍りの
まて出うけそう。ましくあると泊つて暮らう。又はに放蕩と
仕ま後く老爺さんか比喜よもよちあアお在るさうません
一モウ何ともお作あつた。然しこの由お作あつた。モウ初日十九
どうも。何卒若形様を要するもの遊び歩かぬ様ひに
あつたが万一夜ひも引交う。一生のた夕ど遊びの宜が彼
ッテどし。お作あつたおあつたけ。然してゐる。此アお氣に

掛らあていもあつたまひけしお金の入。こまじつア何と
ゆゑ。百もい客のサ。勿論この由家産で一箱の二箱もつ
このつて何でもあつたまじ善むら然し。老爺さんか然し。
いおの様とお方ご子。ま由宜う昔儂いまも洋へんゆりこさ
あつた。あの由家のお宝物小金の結があるまじ。并妙志
とあつた。結が珍を出いしあのお家か。まあけしア由
現敷うまじをい縁ひま。小急なま。まあけしア由。此の
二受をうりし時。つサ。まは老爺さんがテ不測で何ともい

をつけらるる旨の仕作であらうと初左様う正そのめい
 波もあへど。さうもア何様う現届うあへん。何小
 考らぬ。あつと。波もア何様由気小あつ。せん子一
 サア。そは小控して。いふ。う。ある。他。でも。あつ。う。この。ひき。け。を
 いらちの。う。枝。を。集。めて。田。舎。津。氏。の。大。茶。藪。を。さ。る。積。り。
 と。う。の。い。ふ。や。う。さ。の。や。ア。お。お。い。ま。う。正。左。様。サ。人。が。初。め
 ま。い。う。う。些。大。形。の。う。花。や。小。草。う。う。と。あ。ひ。ま。ん。一。さ。う。怒。り。
 吾。儂。が。い。ふ。小。い。さ。う。も。ア。何。様。由。届。あ。る。せ。い。何。様。と

つの。不。精。が。情。こ。と。ま。て。老。爺。さ。ん。が。氣。小。う。け。て。お。在。茶
 ざるの。不。子。根。本。大。形。茶。と。ま。う。て。老。の。一。石。遠。下。の。あ。つ
 時。小。ア。派。あ。い。う。う。ま。ア。く。止。小。成。あ。さ。い。一。ま。の。左。様
 て。さ。い。い。ま。う。が。衣。袋。を。新。祝。小。梅。う。う。う。て。長。振。届。へ
 由。逃。ま。す。ま。ご。各。の。方。で。さ。る。の。い。ま。急。の。急。あ。つ。う。て
 あり。ま。小。余。由。張。色。で。樂。こ。め。て。い。ま。す。う。う。今。止。ま。う
 と。い。ふ。と。連。中。が。承。知。一。ま。い。う。と。あ。ひ。ま。ん。一。ま。あ。う。何。様
 ても。お。あ。つ。う。う。飯。令。逃。小。の。ま。い。急。を。う。う。と

つてそやアおあきの知まこを金ごららサ。今まを換
りて止まうといふ不雅^{ぶげ}どつて彼^{かれ}見^みの久^く人があまりの。矢^や
ちりま^まえ^えそ^そま^まの^の連^{れん}中^{ちゆう}の^の何^{なに}の^のあ^あと
張^はか^かあ^あが^がま^ま格^{かく}お^お真^ま似^にを^をて^て見^み度^どう^う連^{れん}中^{ちゆう}の^の何^{なに}の^のあ^あと
柄^へを^をま^まび^びる^るの^のこ^こヨ^ヨ婦^ふさん^{さん}の^の未^みの^の心^{こころ}縁^{えん}不^ふ対^{たい}て^てお^おあ^あの^の身^みハ
り^り不^ふ及^及を^をぐ^ぐ音^{おん}併^{へい}等^{とう}切^きり^りも^もこの^{この}連^{れん}中^{ちゆう}の^の何^{なに}の^のあ^あと
ま^まだ^だ何^{なに}卒^{そつ}何^{なに}も^もあ^あく^くま^まの^のお^お家^かの^の誓^{ちか}目^めを^をさ^さる^るま^まう^う不^ふと^と朝^{あさ}
小^こ焼^や不^ふ初^{しよ}つて^て飛^ひら^らう^う初^{しよ}め^めの^のま^まう^う未^みの^のお^おあ^あの^の年^{ねん}の^の性^{せい}を^を
時^{とき}を^を妻^{さい}し^しえ^え知^ちる^るま^まい^いけ^けま^まど^どニ^ニ系^{けい}屋^やの^の家^か督^{とく}人^{にん}昔^{むかし}の^のま^まう^うぐ^ぐ

あ^あと^とま^まも^も今^{いま}必^{かならず}く^く存^{ぞん}公^{こう}人^{にん}の^の十^{じゆ}五^ご人^{にん}も^も使^{つか}つて^て飛^ひら^らう^う且^{かつ}那^な不^ふ
ま^まら^らふ^ふとい^いふ^ふ訓^{くん}を^を傳^{でん}ふ^ふ十^{じゆ}志^しを^を孫^{そん}切^きで^で持^もて^て人^{にん}不^ふ押^{おし}付^ける^るま^まま^ま
始^{はじめ}終^{つひ}何^{なに}格^{かく}せ^せう^うり^り事^{こと}不^ふ之^{これ}違^{ちが}う^う禱^{いた}の^の長^{なが}し^しと^と困^{こま}りて^て居^ゐ
る^る訓^{くん}使^{つか}侍^{しやく}と^とま^まの^の且^{かつ}那^な不^ふ思^しひ^ひま^まて^てま^まう^うか^かあ^あま^まま^まが^がま^まは^はら^ら
不^ふあ^ある^ると^とい^いふ^ふ格^{かく}お^お傲^{おご}侍^{しやく}が^が何^{なに}処^{ところ}不^ふあ^あら^らう^うま^まま^まを^をた^た格^{かく}と^とも
ま^まま^まの^ので^で猜^{さい}つ^つこ^こ心^{こころ}を^を出^では^はく^くま^ま皇^{こう}天^{てん}さ^さの^の罪^{つみ}を^を交^か
何^{なに}格^{かく}り^りも^も身^み不^ふあ^あら^らう^うも^も志^しま^まぐ^ぐ津^つま^まら^らあ^あく^くま^まま^ま金^{かね}で^で
ま^まま^まま^ま人^{にん}で^でも^も救^{きう}つて^てま^まま^まま^ま各^{かく}款^{くわん}び^び真^{まこと}利^りも^もう^うま^まく^くら^らが^がけ

とつが僕もこの故郷を出てトお夜が戻つたのこを
初「世話もあつた僕のこと。おんごうる故小日あつた
まア僕ハ止めて。その代り十両さうさう。是で七きく
招ふおつて呉移へう。一志あア仔細もさへせんがテ
残さる。一件と柳河岸のおきさざア。又款づく見派さ
あやア。奥女中の格へで筆を二か筆とさく大選御合で
居ましうけ「左格さうの詮方がおくまの申あア。桃
て。止りけ小由仕移へあいまア格へて送て日宣ハ先へ倍

トせり。いあい。かまね。ゆたけ。さき
て。時を合せまへ。借ひくして由宣「左格さう。あ
金ハまアお款り中ませう。トキニ若旦那此るう。中さうと
あつても。あ一件で聞がはう。志して居ましう。先頃の
門づけ子。彼を所々出。前夜の奴小吏とあく。彼ましう
何格してあつて。あつてさう。あつて女見でせへませえハ
まアの若さう定うさう。あつてまへんが。何格うお款りて居
容る。王子の先の十條小田地。買て居まし。その世話人
あつて奴でさう。田地。買て居まし。是を拵て居た町へ引



然て母子兩個ありて常て居る所が二月哉慈母の病
氣で世の持由出来ばを死で彼嬢が彼振あてに
出ひくその月を送るといふもそのまゝ慈母といふ女が年ハ二十五
六のけしきで滅法美標致勿論年中う乳く身形由
あつたまでも其美若く見えやう。彼不奇標亦衣敷を思せ
粧うといふ所振う。年、取ても若法おせうといふ人の歳子由あつ
た。彼令食は小死のつてもを振あてり。振へてきて洗濯
ぬのや賃針線腰脈をまじして居るが如らひ若て極大痛快

ありやア宜うと彼まじり。レテアアア彼時ふ。そのが正美を喰
せのちやアあまゝ。あんど。モ、彼娘由十五六日見物でもうや
宜う慈母がその氣性ぢやア。まゆあつく。せまふもエ。左振
つてのちやア何あり可おせうお刺しご。まゝ慈母由今の時の
女もやア。あつ。い今挨拶の吳見ふ由。を益き入ふまゝ。金で灸
灸人を救へとてうが成りごとくやア。送へ振へ。うあゝ。まゝ
りんと。左振く。人。氣性の慈母ぢやア。縁由。由緒由。振へ人。う。
縁由を思ひ。條が振へ。と。美う。子。振へ。出。う。う。う。只

不也。冠非来いといて呉家ヨ仕出ハ何処ぞ青若うその
時ふア快血を初めちのと保書を書き
衣敷の出奉次第早い官下初て経文の合馬楽ハ
日暮て帰りゆく

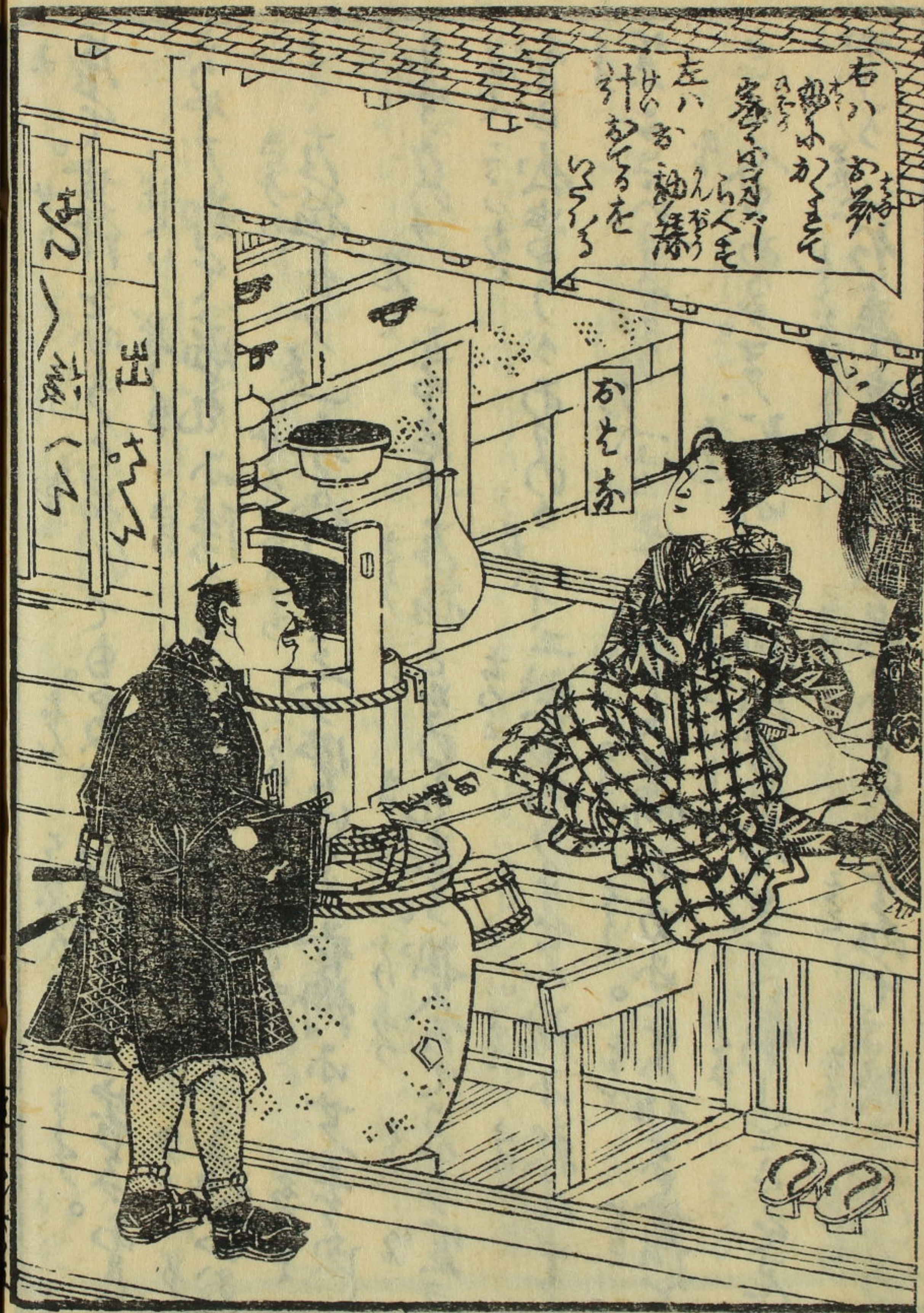
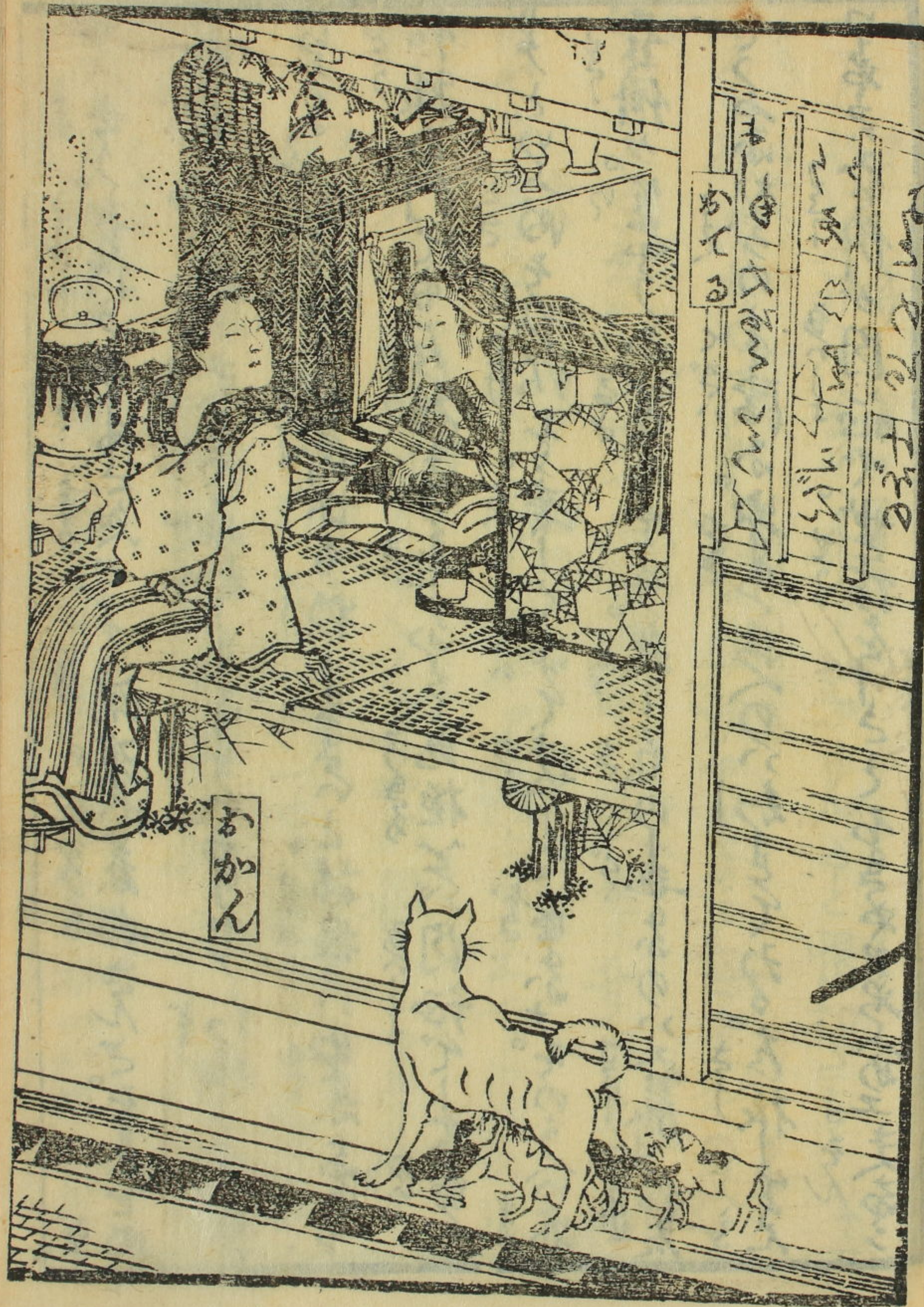
春色淀廻曙第三編卷之中

春色淀廻曙第三編卷之下

東都 松亭金水編次

第五回

不也病災疾苦小罹て艱難災困小及びて相美を
曉る達士といどもその心迷ひ乱れ日暮の志操を失ふ
あり故小艱苦小あふとも惑ひ難小あふとも志を
ぜさるゝ難いふあ況て擇女子の心陵きことよく悟
る稀ありお花の母が病着を只ふくと猶苦小

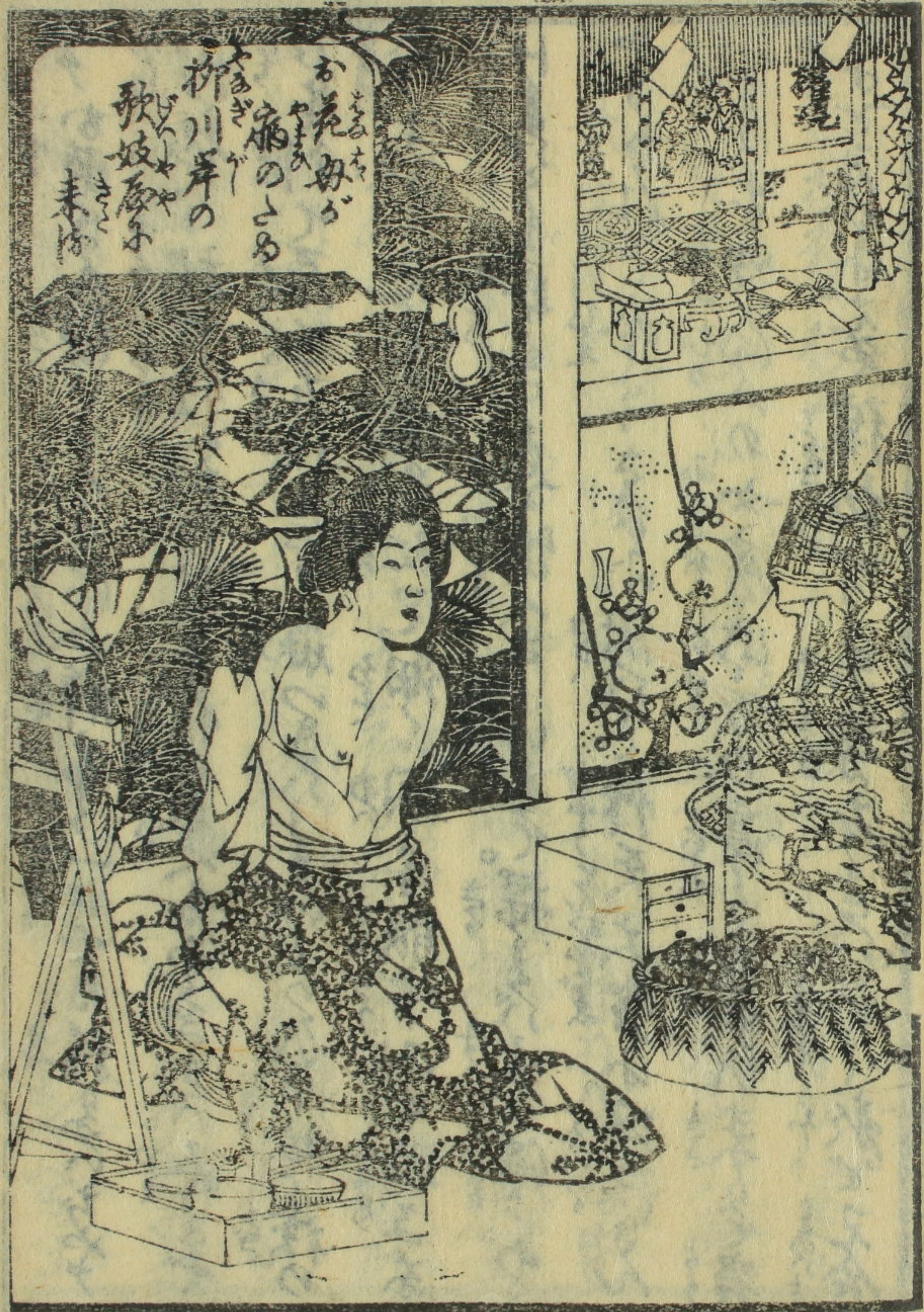


かきまわることへゆりゆりする。人々を憐れむ首を懸ると。但し
らや。息が小ぢりな所が。芽菜れ小ぢりな色ちやア。跡之先
へもさやア。い。一。サ。そ。ま。い。私。小。些。三。了。第。が。中。の。ま
ひ。う。こ。ま。移。ま。す。と。致。ら。ぶ。せ。ん。と。一。日。も。早。く。枝。本。を。う。ま
た。う。り。お。つ。て。お。在。お。ま。ま。一。ま。あ。ち。の。う。張。え。何。様。を。ま
う。あ。ま。い。ぐ。昔。弊。し。小。の。親。の。病。氣。の。人。急。代。子。身。と。う。う
と。い。ん。考。へ。女。見。の。し。と。う。あ。る。よ。も。や。そ。極。あ。る。ち。や。ア。あ。ま。ま。ま
ま。く。そ。極。あ。る。極。げ。こ。し。に。後。小。も。お。つ。て。息。を。さ。え。ん。不。以。以

も。あ。て。極。ま。ら。う。年。老。し。て。居。る。の。ゆ。え。の。由。お。ま。の。極。極。を。り。ん
居。る。と。う。ん。ぐ。こ。も。お。是。然。由。か。ひ。つ。や。今。お。れ。を。も。憐。れ。ま。い
その。お。ま。し。小。身。と。法。と。で。それ。で。息。が。小。ぢ。り。な。こ。と。を。憐。れ。し。と。も。何
と。も。あ。い。一。ま。い。を。極。ま。ら。ぶ。ち。や。ア。中。の。身。を。せん。が。多。う。く。法。と。か
時。が。あ。ら。う。ヨ。さ。ら。に。や。ア。世。界。の。味。を。い。げ。し。と。女。見。を。法。と。その。全
心。を。業。で。所。で。息。が。小。ぢ。り。な。ま。う。う。教。会。へ。その。女。見。の。身
法。を。す。ま。い。え。の。ゆ。え。か。ま。と。法。に。可。愛。さ。う。と。法。を。小。居。る
ハ。直。け。れ。ど。そ。ま。ま。ち。や。ア。業。も。所。で。あ。ま。ま。だ。死。ん。で。見。え。る。の。時

あふ。はひ。裏の内儀さん。井戸橋で。一。と。使
こふ。免。不。此。使。の。性。使。堅。い。く。と。い。を。通。て。由。島。の。録。豆
時。分。来。て。と。ち。け。る。附。小。の。を。ち。け。る。力。の。多。か。た。え。ん。り。十
六。日。未。元。日。で。も。出。て。さ。ま。ん。ど。この。用。の。た。夜。の。才。子。と。使。女
も。ま。ま。時。で。巻。く。勢。し。何。れ。も。あ。ら。ま。や。ア。島。が。や。ア。あ。ま。は
ろ。才。子。ハ。十。九。の。二。十。十。度。り。約。金。を。ご。り。う。私。方。へ。勢。金
て。耳。小。貫。の。さ。さ。り。巻。冊。も。些。ハ。安。法。が。出。身。る。ご。り。う。と
入。る。世。界。も。人。の。台。置。く。鳴。を。り。て。り。と。け。道。ど。あ。り。く

あ。の。と。彼。様。が。さ。さ。り。巻。冊。も。水。性。を。す。り。や。う。ま。性。ぢ。や。ア。秘。人。と。あ。の
て。居。る。先。刻。さ。し。け。ハ。今。約。つ。う。中。身。が。何。処。へ。付。き。金
が。探。し。て。強。い。て。居。る。の。井。ち。根。を。て。り。や。ア。モ。ン。勢。一。と。く
あ。の。中。の。さ。が。あ。個。で。強。出。し。ま。が。や。ア。あ。ま。は。つ。何。れ。も。由。り
あ。ら。う。居。る。之。の。ハ。不。測。と。下。ま。ま。を。巧。ま。の。傍。と。り。ぬ
か。使。女。も。親。信。つ。ま。さ。の。あ。ま。が。枕。を。搦。げ。附。せ。つ。て
死。車。り。一。そ。り。や。ア。妹。さん。心。ま。る。エ。ち。根。も。不。動。の。密。子
と。い。は。ち。根。の。さ。さ。り。あ。る。ま。へ。と。ま。ま。の。う。へ。仲。筋。を。り。か



芦あしかあ懸かさんさん温あつまままま。ほほ心こころ解とああうう一口いちくちでもでも後あとああいいちちやや
まごころ性しやう移うつ入いしし枕まくらのの後あとへへおおつつけけてもでも何なんれれのの参まゐ入いももああららまままままままままま
まごころ口くちをを利きてて居ゐてて後あとににああららまままままままままままままままままま
まごころ終まつりりとと見みるるふふ遠とほをを切きりり。細こまくく開ひらくく眼まなこ中なかははもも静しずままああ
まごころけけははららううちち静しずままきき。まままままままままままままままままままままま
まごころややううかかれれどど冷ひやままるるささああふふ。僕わがららとと作しやう天てん大だい勢しやうふふ学がく法ぽうええん
まごころととまままままままままままままままままままままままままままままままままままままま
まごころ子こととまま

後三三下十六

走はののここをを飛とハハ何なん処ところへへとと尋たずぬぬまままままままままままままままままま
まごころ性しやうへへゆゆぬぬまままままままままままままままままままままままままままままままままままままま
まごころ小こ又またハハ不ふ測そくとと怪あやししむむものものらら。何なん処ところとと尋たずねねんん方かたももはは
まごころささまま
まごころかかんんてて定さだめめるる。良よ時とき移うつりり夜よハハまままままままままままままままままままままままままままままままままままままま
まごころももまま
まごころ夜よもも長なが屋やのの代かりりまま
まごころ目めももおお花はなハハゆゆららぬぬ。花はなハハ老らうれれ後あとどどけけ修しゆ小こ持ぢかくかくべべきき小

方志をばかりまきこといふはる樂由拍子ねり礼とい
きそくく小あし入出まは後の方より身まき樂え何処
お出まするこ工下をけられ振むけは柳川岸の春巻
小尾の依ゆといふ樂也一イヤ夫を所へまら一振こ
は小憑まきこて大き小洞を漕中こ一ハテそやや何
振一と注ト二又連をりゆりゆ。あは注現ハ才は編の首
の表ふて積く解へ一

春色淀廻曙第三編卷之下終

それ ところのトもあはる
まよりことと立除がよみ初と一人で志次多くもわぬ法義初と平
く小妻もくひ心秋おまは佐良の若光さくまると披あし一尻
うらふてこちあき一日まきそ影系る樂初と舞より春介
るの紙お花小若んといふ縁てええの石屋の裏へ運入て
まはるは処かと探せといえ末その名も一とまきハ舞の迷
ひて裏あがの門はまきまきては裏より門つげ小若高名
あるとまきハ女房ハこちまきてあやど先次若とら小鳴とま
只向よの宅まき一との頃初とてあハ亡なりその女見ハ社

方々までびかりまきこといふは字楽由拍子ぬれと不
きそらくいふは入如まは後の方うう言まはる樂え何延
お出まするこエ下なうけられ振むけは柳川岸の香巻
小尾の佐和といふは樂一不や夫所へまら一飛と
付小憑まきこといふは小洞を濠一中こハテそやや何
振とまらト又連をら帰りゆく。その後流ハ身は編の首
の表ふて精く解へ

春色淀迺曙第三編卷之下終



